

(2024年2月5日：修論公聴審査会)

# ジョセフ・ワイスの制御－克服理論 ——無意識的なテストとしての精神分析セッション——

比較文明学 M3

藤井 康子

## はじめに

- ▶ 米国の精神分析家ジョセフ・ワイス Joseph Weiss (1924-2004) は、ジークムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939) の晩年の理論に基づいて制御－克服理論 (Control-Mastery Theory : CMT) と呼ばれる独自の精神分析理論を構築した (Weiss et al. 1986a; Weiss 1993)。
- ▶ 同理論は、すべての精神病理とその治療過程を、無意識の「病因的信念 (pathogenic belief)」の観点から理解するものである。それによれば治療過程とは、患者が病因的信念を反証すべく分析家と作業する過程である (Weiss 1986b: 325-9, 1993: 9)。
- ▶ 「病因的信念」は、精神病理の原因となる信念を意味する。

## 制御－克服理論に関する書籍と著者らについて

- ▶ 制御－克服理論についての最初の本である *The Psychoanalytic Process* の著者は、ワイスとハロルド・ Sampson Harold Sampson (1925-2015) とシオンの丘心理療法研究グループである。1972年、UCSF (カリフォルニア大学サンフランシスコ校) メディカルスクール精神医学科臨床教授であった二人は、同理論の妥当性を正式な定量的研究によって検証する目的で、「シオンの丘病院」に同グループを設立した (Weiss et al. 1986a: v)。
- ▶ 同書の第2部「実証研究の結果」には、二人の指導の下、同グループによって実施された計8件の実証研究の記録が収められている。
- ▶ 全体がワイスの単著である二冊目の *How Psychotherapy Works* は、著者らによる実証研究の対象が「精神分析」から「精神分析的心理療法」へと拡張されたこともあり、より包括的な著作となっている。

# 制御－克服理論に関する 海外の先行研究

- ▶ Scopusを用いて調査したところ、1979年から現在までの間に、計104件の同理論に関する論考が発表されていた。これらの多くは心理学と医学の観点からの研究であった。
- ▶ 筆者が今後、同理論を応用していきたいと考えている文芸評論——ここでの「文芸」にはアニメやマンガ等も含む——をトピックとする研究は一件も見られなかった。

# 制御－克服理論に関する 日本の先行研究

- ▶ 制御－克服理論についての二冊の本は、いずれも日本語訳が出版されていない。このため、本邦では同理論がほとんど知られていないのが現状である。
- ▶ Cinii Researchを用いて調査したところ、本邦における同理論についての先行研究は、心理療法家・臨床心理学研究者である高森淳一による以下の2件のみであった。
  - ▶ 高森はまず、2007年の「Weissの制御－克服理論——能動反転テスト」において、同理論の概要を紹介し、つづく2010年の「制御－克服理論からみた来談者中心療法の一事例」において、来談者中心療法の創始者カール・ロジャーズCarl Rogers（1902-1987）の事例の経過が同理論の観点からも説明可能であることを示した。
- ▶ 高森は同理論を、「これまでほとんど注意されてこなかった臨床的側面に光をあてた」（高森 2007: 83）として高く評価する一方、「制御－克服理論は治療関係の展開に密着した理論であるがゆえに、**文芸評論**や**文化批評**への応用には役だちそうもない」（高森 2007: 83）と評した。

## 先行研究の分析

- ▶ 先行研究はいずれも、制御－克服理論の文芸評論への応用可能性に着目していない。これは、ジャック・ラカン Jacques Lacan (1901-1981) の精神分析理論が近年、日本のオタク文化の評論や研究に盛んに用いられていることとは対照的である（例えば、斎藤 2006; 檜村 2007）。

## 研究の目的

- ▶ 筆者の将来的な研究目標は、ワイスの制御－克服理論を用いて、オタクの「萌え」に関する文芸評論を行うことである。
- ▶ 「萌え」とは、キャラクターに対する強い愛着や欲望を表す俗語であり、男性オタクの「美少女キャラクター萌え」や、女性オタクが男性キャラクター同士の恋愛を描いたボーイズラブ（BL）を好む現象において、観察される。
- ▶ そのため本研究ではまず、ワイスの二冊の著書に基づいて、同理論を日本の研究者向けに紹介する研究を行うこととする。（前回発表からの変更点）

# 研究の構成

- 序章 研究の背景・目的・意義・構成
- 第1章 ワイスの制御－克服理論の理論的な背景
- 第2章 制御－克服理論の概要とワイスの著書の要約
- 第3章 精神分析の臨床場面以外における事例
- 第4章 制御－克服理論の特徴——フロイト、ラカンとの違い
- 終章 まとめと展望

# 第1章 ワイスの制御－克服理論の理論的な背景

- ▶ 本章の目的は、（1）哲学的な関心に基づいて精神分析理論を研究する研究者や、（2）精神分析理論を社会文化研究に応用する研究者向けに、**フロイト**の理論と**ワイス**の理論の**関係**を明らかにすることである。



## 二つの精神分析理論

### 自動機能仮説（AFH）と高次精神機能仮説（HMFH）

- ▶ ワイスは、フロイトの精神分析理論を「**自動機能仮説**（automatic-functioning hypothesis: **AFH**）」と「**高次精神機能仮説**（higher-mental-functioning hypothesis: **HMFH**）」という二つの要素に大別し、後者のみに基づいて制御－克服理論を確立した（Weiss 1986a: 22, 1986b: 323）。
  - ▶ ワイスが「自動機能仮説」と呼ぶのは、フロイトが主に「心理学草案（1985）」・「夢解釈（1900）」・「技法に関する論文集（1911-1915）」等**前期**の著作において体系的に展開した考え方である。
  - ▶ ワイスが「高次精神機能仮説」と呼ぶのは、主に「快原理の彼岸（1920）」・「制止、症状、不安（1926）」・「続・精神分析入門講義（1933）」・「精神分析概説（1940）」等**後期**の著作においてフロイトが断片的に導入した考え方である。

# AFHの人間観

- ▶ 無意識の心にはそもそも**思考能力がない**。
- ▶ このため、人間の無意識的な**動機**（衝動あるいは欲動と**防衛**）は、**現実を無視した盲目的で非合理的なもの**である。
- ▶ したがって、人はこれらの無意識的な力によって操られる哀れな「**操り人形**」のような存在である。小さな男の子が母親に対して抱く**性的欲望**や父親に対して抱く**殺意**は、これらの力の反映であり、克服されなければならない**幼児性**である。

# HMFHの人間観

- ▶ 人が何かを抑圧するのは、それを意識したり表出したりすることが危険であるという現実についての無意識的な**判断**に基づく。
- ▶ この判断は、盲目的にではなく、ある理論（病因的信念）に則った**現実**についての**危険予測**に基づいてなされる。
- ▶ その点、無意識の心は**現実適応的**で賢く、また**合理的**でもある。
- ▶ 小さな男の子が母親に対して抱く**性的欲望**や父親に対して抱く**殺意**は、子どもの未熟さを考慮すれば十分に**適応的**な計画である。

# 夢についてのフロイトのAFH

- ▶ AFHは、人間の精神生活の大部分が、**本人のコントロールを超えた衝動と防衛**という力の力動的な相互作用によって**自動的に**決定されると見なす。「**衝動**は即時的な満足を求め、**防衛**は衝動の出現に反対する」（Weiss 1986a: 5）。この考え方は、フロイトが「心理学草案（1895）」の「緒言」で表明した、**自然科学としての心理学**の構想に基づいており、その構想とは、心理的過程を、諸力の力学的な相互作用による**定量的な決定状態**として記述しようとする決定論であった（Freud 1987: 387=2010: 5; Weiss 1986a: 25）。
- ▶ 「夢解釈（1900）」における「**夢は願望充足である**」（Freud 1942a: 127=2007: 4巻165）とのテーゼは、確かに「**本能的衝動**が、睡眠によって弱められた**防衛**に打ち勝って、**自動的に**満足を達成する」という決定論として理解することができる。

# 夢についてのフロイトのHMFH

- ▶ HMFH は、自我が**現実**についての評価・決断・推論・計画等の**高次精神機能**を駆使して、かなりの程度まで無意識の精神生活を**コントロール**していると見なす考え方である（Weiss 1986a: 30-1, 1993: 17）。
- ▶ 「精神分析概説（1940）」における、「自我が下した**決断**の結果として、〔夢の中で〕ある種の願望が成就するように描かれることがある」（Weiss 1986a: 121）という考え方は、HMFHに当たる。

## 二つの精神分析理論が治療に対してもつ意味

- ▶ ワイスによれば、二つの精神分析理論（AFH／HMFH）に依拠する分析家は、それぞれ異なる治療観に基づいて治療に当たる。
- ▶ AFHに依拠する分析家は、分析家に対する患者の「転移」を、現実を無視した幼児的満足の追求であると見なし、患者が満足を得ることを妨害する。これによって欲求不満に陥った患者は、衝動と防衛のバランスを崩し、その結果、葛藤を意識化することができるようになると考えられる（Weiss 1986b: 332）。
- ▶ HMFHに依拠する分析家は、「転移」を、現実の分析家との関係の安全性を確かめるために患者が無意識的に行うテストであると見なす。このため分析家は、患者が安全だと感じられるような形でこれに応答することを目指す。なぜなら、抑圧をコントロールしている患者の自我は、抑圧された心的内容が、自分自身や分析家との絆を脅かすことはないとは無意識的に判断すれば、抑圧を解除することができると考えられるからである（Weiss 1986b: 332）。

## 二つの精神分析理論による相反する予測と それに基づくAFHの反証

- ▶ このためワイスらは、精神分析過程において、分析家が患者の**転移的要求**に対して**中立的**に応答するポイントに着目した（Weiss et al. 1986a: 267-76）。それぞれの理論に依拠する分析家は、それぞれ異なる理由からではあるが、どちらも高頻度に、患者の転移的要求に対して中立的に応答する（Weiss et al. 1986a: 267-76）。
- ▶ ただし、この同じ介入によって、**AFH**に依拠する分析家が意図しているのは「**患者の願望を挫くこと**」であり、**HMFH**に依拠する分析家が意図しているのは「**患者の安心**」であるという違いがある。
- ▶ このため**AFH**は、中立的な応答に対して患者が**強い欲求不満に陥る**と予測し、**HMFH**は患者が**安心する**と予測する。これらの相反する予測のうちどちらが正しいかは、定量的な観察によって決定可能である。
- ▶ ワイスらは、**ワイスの理論とは無関係な分析家**の分析過程において、患者の治癒はAFHが予測する仕方ではなく、**HMFH**が予測する仕方では達成されるということを、厳密な定量的手法によって実証した（Weiss et al. 1986a: 140-320; Weiss 1993: 167-89）。

# 精神分析的思考の「パラダイム」 としてのAFH①

- ▶ ワイスは、フロイトの著作に「AFHからHMFHへの移行」という傾向が存在すると考えていたが、これを文献学的に証明する研究は行わなかった（Weiss 1986a: 23-4）。
- ▶ これはワイスが、「精神分析過程はAFHよりもHMFHによってよりよく説明される」というテーゼを証明することの方に関心があったためである（Weiss 1986a: 24）。
- ▶ ワイスと Sampson は、*The Psychoanalytic Process*における彼らの研究意図を、科学哲学者トーマス・クーン Thomas Kuhn (1922-1996) の『科学革命の構造』における「パラダイム論」に基づいて提示した。しかし彼らは、クーンの用語をパラフレーズし、「パラダイム」等の用語自体を用いなかったため、その説明は分かりにくいものであった。



# 精神分析的思考の「パラダイム」 としてのAFH②

- ▶ このため筆者は、クーンのパラダイム論の用語を補足しつつ、二人の意図を以下のようにパラフレーズした。
- ▶ ワイスと Sampson は、精神分析の成立以降、分析家たちに広く受け入れられてきたAFHを、クーンのパラダイム論における「パラダイム」——研究者の思考を規定する「幅広い主要な科学的仮説」（Weiss & Sampson 1986: 342）——として捉え、代替理論（制御—克服理論）によるパラダイム・シフトを図ったのである（Kuhn 2012: 149=2023: 230; Weiss & Sampson 1986: 341-3）。



## 第2章 制御－克服理論の概要とワイスの著書の要約

2.1 制御－克服理論の概要

2.2 The Psychoanalytic Processの要約

2.3 How Psychotherapy Worksの要約

2.4 第2章の結論

## 2.1 制御－克服理論の概要

- ▶ 人は主に、幼少期の両親との関係におけるトラウマ的な経験からの推論によって無意識の病因的信念を獲得する。
- ▶ 病因的信念は、その人が望ましい適応的な目標を追求しようとする時、自分自身や愛する人を危険にさらすことになることを警告する。このため信念の持ち主は、危険であるとされた衝動や感情や目標を封印し、症状や制止を発展させる。
- ▶ 患者は、信念が予告する危険を避けるため信念に従うが、意識的にも無意識的にもそれを反証し、信念によって禁じられた目標を追求できるようになりたいと考えている。
  - ▶ 患者は、一群の密接に関連する複数の病因的信念を、どのような順序で反証していくかについての無意識的な計画をもっており、それに沿って治療過程をコントロールする。

# 患者の無意識的なテスト

- ▶ 患者は治療者との関係において、信念が予告する危険が**現実**のものであるかどうかを**テスト**する。
- ▶ 患者の無意識的なテストは、「**信念の検証** (testing of one's pathogenic beliefs)」 (Weiss 1986a: 14, 101) であると同時に、「**治療者に対するテスト** (testing of the analyst)」 (Weiss 1986a: 99) でもある。
- ▶ これらを同時にテストすることができるのは、患者がテストに対する治療者の反応を、「**信念を裏づけるか、反証するか**」という観点で評価するからである (Weiss 1993: 129)。
- ▶ 患者のテストは、「**転移テスト** (transference test)」 (Weiss 1993: 105) と「**能動反転テスト** (passive-into-active test)」 (Weiss 1993: 105) に大別できる。いずれのテストにおいても患者は、病因的信念の起源となった**トラウマ**を治療者との関係において**再現**し、治療者を信念が予測する方向へと誘導しつつも、それとは異なる反応を期待する。

# 転移テスト

- ▶ 「**転移テスト**」において患者は、かつてトラウマとして経験した親の行動を「誘発した」と信じる自身の行動を再現する。
- ▶ 例：子どもの頃、強い喜びで有頂天になっているときに、親から理不尽に叱責され、「**喜びすぎると人を傷つけるから、喜びは抑制しなければならない**」という病因的信念を身につけた患者は、自分が喜ぶことに対して、**治療者がどのように反応するのか**を確かめることによって、転移テストを行う可能性がある。
- ▶ これに対して、もし治療者が患者の親と同様、冷たい態度をとれば、患者の信念は裏づけられ、治療者はテストに**落第**する。反対に、もし治療者が好意的に振る舞えば、患者の信念は反証され、治療者はテストに**合格**する（Weiss 1986a: 101-9）。

# 能動反転テスト

- ▶ 「能動反転テスト」において患者は、かつて自身がトラウマとして経験した親の行動を治療者に対して再現する。
- ▶ 先程の例の患者は、治療者が喜んだ際にそれを非難し、治療者が非難に屈するかどうかを確かめることによって「能動反転テスト」を行う可能性がある。
- ▶ これに対して治療者が、患者に気を使い、患者の前で喜びを抑制するようになれば、患者の信念は裏づけられ、治療者はテストに落第する。反対に、もし治療者が、悪びれる様子を見せなければ、患者の信念は反証され、治療者はテストに合格する（Weiss 1986a: 101-9）。

# 治療者がテストに合格することが 治療の鍵となる

24

- ▶ 治療者は、患者についてのあらゆる情報から、患者の**病因的信念**・計画・目標、患者が行う**可能性の高いテスト**を予測し、患者のテストに**合格**する必要がある。
- ▶ 治療者がテストに合格した直後から、患者は例外なく安堵し、治療者をより信頼するようになる。また患者は、自身の病因的信念が警告する**危険が実現しなかった**ことを理解し、**信念を変え**始める。
  - ▶ これにより、信念をテストすること自体への恐れも軽減されるため、患者は以前にもまして**大胆に信念をテスト**するようになることがある（Weiss 1993: 45）。
  - ▶ さらに、それまで封印してきた衝動や感情を経験しても大丈夫だと無意識的に判断するため、患者はそれらに対する**抑圧・制止を解除**し、それらを意識化したり、自由に表出したりするようになる。これには、病因的信念自体の意識化や、信念の発端となったトラウマ的経験の想起も含まれる。さらに、信念によって封印されていた発達上の**目標**を追求することができるようになる。
  - ▶ テストは、心理療法においてだけでなく、日常生活においても、人間が環境に適応するため**現実検討**の一部として行う基本的な活動である（Weiss 1986a: 103, 1993: 92）。

## 第3章 精神分析の臨床場面以外における事例

- 3.1 ハッピーエンドで泣けること、N医師の事例
- 3.2 ホロコースト生存者についてのニーダーランドの研究
- 3.3 児童養護施設に収容された子どもたちについてのベレスの研究
- 3.4 捕虜となった兵士の夢についてのバルソンの研究
- 3.5 スターンの乳幼児研究
- 3.6 第3章の結論

### 3.1 ハッピーエンドで泣けること、N医師の事例

- ▶ 「ハッピーエンドで泣けること」とは、恋愛映画を見ている観客が、映画の途中の恋人たちが仲違いし、離ればなれになる辛いシーンでは泣かないのに、二人が困難を解決し、仲直りするラストシーン——つまり、もはや何も悲しむべきことがなくなったタイミング——で、幸せを感じながら涙を流す、という逆説的な現象を指す（Weiss 1986a: 8-10）。
- ▶ これに関連する「N医師の事例」とは、幼い息子を亡くした後、息子に関するほぼすべての記憶を失っていたワイスの同僚であるN医師が、その9年後に男の子を無事出産した際、最初の息子の記憶を取り戻し激しく泣いた（しかも、感情に圧倒されることはなかった）、という事例である。N医師は分析患者ではない（Weiss 1986a: 10-1）。

- ▶ ワイスはこれらの事例に、「悲しみの原因となった**困難が緩和されたタイミング**で、人は「**悲しみ**」を**表出**する」という共通の構図を見出した。
- ▶ この構図をワイスは、「状況の**危険性**についての無意識的な**判断**に基づいて、人は**抑圧をコントロール**することができる」（Weiss 1986a: 8）という**HMFH**の考え方に基づいて説明した。
- ▶ つまり人は、「悲しみ」に圧倒されそうなタイミングでは**防衛**を強め、そのような**危険**が過ぎ去ると**防衛**を解除する、ということである（Weiss 1986a: 9）。
- ▶ 他方、**AFH**によれば、人は抑圧に対してこのような**コントロール**を及ぼすことは**できない**はずである（Weiss 1986a: 9）。

- ▶ ワイスは、一人目の息子を亡くした際、N医師が「自分は母親としてふさしくない」という**病因的信念**を獲得していた可能性、そして、**二人目の息子の誕生**によって、その信念が**反証された**可能性を示唆した（Weiss 1986a: 11）。
- ▶ この場合、N医師の二度目の**妊娠と出産**は、病因的信念の**テスト**として機能したことになる。
- ▶ ワイスは、**主人公に同一化**しながら映画を見ている観客が、映画の中の**主人公の状況に応じて**、自身についての**危険と安全の判断**——観客自身が「悲しみ」に圧倒される危険性についての判断——を行うと明示した。
- ▶ この現象は、病因的信念が予告する危険に対して「**治療者が耐えられるかどうか**」に応じて、患者が自身についての**危険と安全の判断**を行う「**能動反転テスト**」に類似している。

## 第4章 制御－克服理論の特徴 ——フロイト、ラカンとの違い

- 4.1 治療に関する二項対立的な議論を無効化する理論
- 4.2 シンプルな理論
- 4.3 現実への適応を人間の中心的な動機とする理論
- 4.4 科学的な検証に対して開かれた理論
- 4.5 性に関する人間の経験を男女の区別なく分析できる理論
- 4.6 第4章の結論

## 4.1 治療に関する二項対立的な議論を無効化する理論

- ▶ ワイスは、自説についてフロイトやラカンのような学派的主張を行わなかった (Weiss 1998: 452)。「学派的主張」とは、高森によれば、ある治療的接近に特権的重要性を付与する議論である (高森 2010: 28)。
- ▶ 反対に、ワイスが強調するのは、「実に様々な治療的アプローチが成功を収める」 (Weiss 1998: 452; 高森 2010: 29) こと、特定の患者の最適な支援のためには、どんな既存の治療的枠組みも不十分であること (Weiss 1993: 21)、「治療者のアプローチは事例特異的でなければならない」 (Weiss 1993: 16) ことである。
- ▶ ワイスのこのような姿勢は、高森が指摘するように、制御—克服理論が心理療法の学派ではなく、心理療法に共通する原理についての理論である、という事情から説明することができるだろう (高森 2007: 63, 2010: 29)。

- ▶ 心理療法の世界では、「経験」対「洞察」、「対話的」対「解釈的」等、治療に関するさまざまな二項対立的議論が存在してきた。
- ▶ 「学派的主張」もまた、学派が特権的に「良し」とするものとそうでないものとの対立を作り出すという意味で、二項対立的な議論である。
- ▶ これらの対立に対して制御－克服理論は、対立する二者のうち、前者が病因的信念の反証に役立つ場合もあれば、後者が役立つ場合もある、ある場合にどちらが役立つかは、患者の病因的信念による、という形で対立を無効化する（Weiss 1986b: 329-30; Sampson 1993: viii）。
- ▶ 制御－克服理論は、任意の心理療法的アプローチが、ある患者に有効な理由、無効な理由を説明することができる包括的な心理療法の理論であると考えられる。

# 結語

第1章 ワイスの制御－克服理論の理論的な背景

第2章 制御－克服理論の概要とワイスの著書の要約

第3章 精神分析の臨床場面以外における事例

第4章 制御－克服理論の特徴——フロイト、ラカンとの違い

- ▶ 本研究をもって、**制御－克服理論**を使用した**哲学的研究**の**基礎**を築くことができたと考えられる。

# 文献

- ▶ Freud, Sigmund, 1941a, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Abriss der Psychoanalyse," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 17*, Imago Publishing Co., Ltd., 65-138. (津田均訳, 2007, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任・渡辺哲夫編, 「精神分析概説」『フロイト全集22』岩波書店, 179-250. )
- ▶ ———, 1942a, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Die Traumdeutung," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 2 und 3*, S. Fischer Verlag, 1-642. (新宮一成訳, 2007・2011, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「夢解釈」『フロイト全集4・5』岩波書店. )
- ▶ ———, 1943a, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Die Handhabung der Traumdeutung in der Psychoanalyse," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 8*, S. Fischer Verlag, 350-7. (高田珠樹訳, 2009, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「精神分析における夢解釈の取り扱い」『フロイト全集11』岩波書店, 277-83. )

- ▶ ———, 1943b, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Zur Dynamik der Übertragung," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 8*, S. Fischer Verlag, 364-74. (須藤訓任訳, 2009, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「転移の力動論にむけて」『フロイト全集12』岩波書店, 209-20. )
- ▶ ———, 1943c, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Rathläge für den Arzt bei der psychoanalytischen Behandlung," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 8*, S. Fischer Verlag, 376-87. (須藤訓任訳, 2009, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「精神分析治療に際して医師が注意すべきことども」『フロイト全集12』岩波書店, 247-57. )
- ▶ ———, 1943d, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Zur Einleitung der Behandlung," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 8*, S. Fischer Verlag, 454-78. (道籟泰三訳, 2010, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「治療の開始のために」『フロイト全集13』岩波書店, 241-69. )

- ▶ ———, 1946a, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 10*, S. Fischer Verlag, 126-36. (小此木啓吾訳, 1970, 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎編, 「想起、反復、徹底操作」『フロイト著作集6』人文書院, 49-58. )
- ▶ ———, 1946b, Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower eds., "Bemerkungen über die Übertragungsliebe," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Chronologisch Geordnet 10*, S. Fischer Verlag, 306-21. (道籟泰三訳, 2010, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「転移性恋愛についての見解」『フロイト全集13』岩波書店, 309-25. )
- ▶ ———, 1987, Angela Richards ed., "Entwurf einer Psychologie," *Sigm. Freud Gesammelte Werke Nachtragsband*, S. Fischer Verlag, 387-480. (総田純次訳, 2010, 新宮一成・鷺田清一・道籟泰三・高田珠樹・須藤訓任編, 「心理学草案」『フロイト全集3』岩波書店, 5-105. )
- ▶ Kuhn, Thomas, 2012, *The Structure of Scientific Revolutions 4th edition*, The University of Chicago Press. (青木薫訳, 2023, 『新版 科学革命の構造』みすず書房. )
- ▶ Weiss, Joseph, 1986a, "Theory and Clinical Observations (Part 1: Chapter 1-7)," *The Psychoanalytic Process: Theory, Clinical Observations and Empirical Research*, The Guilford Press, 3-138.

- ▶ ———, 1986b, "A Broad Look at the Theory (Chapter 21)," *The Psychoanalytic Process: Theory, Clinical Observations and Empirical Research*, The Guilford Press, 323-36.
- ▶ ———, 1993, *How Psychotherapy Works*, The Guilford Press.
- ▶ Weiss, Joseph & Harold Sampson, 1986, "The Research: A Broad View (Chapter 22)," *The Psychoanalytic Process: Theory, Clinical Observations and Empirical Research*, The Guilford Press, 337-47.
- ▶ Weiss, Joseph, Harold Sampson & the Mount Zion Psychotherapy Research Group, 1986a, *The Psychoanalytic Process: Theory, Clinical Observations and Empirical Research*, The Guilford Press.
- ▶ 檜村愛子, 2007, 『ネオリベラリズムの精神分析—なぜ伝統や文化が求められるのか』 光文社.
- ▶ 斎藤環, 2006, 『戦闘美少女の精神分析』 筑摩書房.
- ▶ 高森淳一, 2007, 「Weissの制御—克服理論—能動反転テスト」 『天理大学学報』 58(2): 61-87.
- ▶ ———, 2010, 「制御—克服理論からみた来談者中心療法の一事例」 『天理大学学報』 61(2): 21-48.

おわり